

通信



日仏東洋学会

1991年8月

東京・京都

第13号

日 仏 東 洋 学 会

会 長: 福 井 文 雅
名 誉 会 長: CECCALDI, Hubert・山 本 達 郎・WASSERMAN, Michel
顧 問: 秋 山 光 和・江 上 波 夫・藤 枝 晃・市 古 貞 次
彌 永 昌 吉・井 筒 俊 彦
評 議 員: 竺 沙 雅 章・DURT, Hubert・福 井 文 雅・濱 田 正 美
羽 田 正・池 田 温・石 沢 良 昭・石 井 米 雄
彌 永 信 美・狩 野 直 禎・加 藤 純 章・興 膳 宏
桑 山 正 達・京 戸 慈 光・前 田 繁 樹・松 原 秀 一
御 牧 克 己・森 安 孝 夫・中 谷 英 明・坂 出 祥 伸
高 田 時 雄・田 中 文 雄・坪 井 善 明・八 木 徹
山 田 利 明
代 表 幹 事: 興 膳 宏
幹 事: 濱 田 正 美・石 沢 良 昭・加 藤 純 章・前 田 繁 樹
御 牧 克 己・中 谷 英 明・高 田 時 雄・八 木 徹
監 事: 池 田 温・石 沢 良 昭
会 計 幹 事: 羽 田 正
推 薦 委 員 会: 福 井 文 雅・池 田 温・加 藤 純 章・興 膳 宏
御 牧 克 己・山 本 達 郎

事 務 局

〒606 京 都 市 左 京 区 吉 田 本 町 京 都 大 学 文 学 部
興 膳 宏 研 究 室 Tel. 075.753.2808

通 信 編 集 委 員 (五 十 音 順)

興 膳 宏・高 田 時 雄・中 谷 英 明・羽 田 正
浜 田 正 美・御 牧 克 己・八 木 徹

入 会 申 し 込 み ・ 会 費 納 入 (年 会 費 3,000円)

〒113 東 京 都 文 京 区 本 郷 7-3-1 東 京 大 学 東 洋 文 化 研 究 所
羽 田 正 まで Tel. 03.812.2111.

『 通 信 』 の 記 事

〒673 神 戸 市 西 区 伊 川 谷 神 戸 学 院 大 学 人 文 学 部
中 谷 英 明 まで Tel. 078.974.1551.内 線 2359

目 次

追 悼	
大地原豊先生御逝去	
島田虔次、福井文雅、御牧克己、中谷英明	----- 2
学会消息	
「ロベール・ランガ先生以後」 石井米雄	----- 11
国際会議	
日仏シンポジウム『諸地域文化への仏教の適応』	
プログラム	----- 12
フランス書・中国書	
新刊紹介：銭林森編『牧女与蚤娘』 興膳宏	----- 13
最新号の目次：1. Journal Asiatique (御牧克己)	----- 15
2. Etudes Chinoises (興膳宏)	
3. 通報 T'oung Pao (高田時雄)	
会員消息	
原実氏 スウェーデン王立学士院 外国人会員に	----- 18
大谷暢順氏受勲・会員出版物・新入会員・その他	--- 18
フランスからの来日	
ジャン・カルマール教授の来日 (羽田 正)	----- 20
報 告	
平成二年度会員総会 (田中文雄)	----- 20
会員名簿	----- 24
編集後記	----- 31

大地原豊先生御逝去

本会顧問大地原豊先生（京都大学名誉教授）は、本年2月8日御入院先の病院で急性心不全のために逝去された。

先生は昭和58年の本会再建に当たって中心的な役割を果たされて以来、昭和63年の第5回日仏シンポジウムの京都部会（『中央アジア諸言語文書』）の開催に献身されるなど、その稀有の情熱によって本会の活動を支え、続く世代の育成に当たってこられた。

余りに突然に我々のもとを去られたことは、先生にふさわしい振舞いとも言えようが、寂寥の感はいよいよ深い。ここに謹んでご冥福を祈り、先生を偲ぶ文章を収載する。

「追憶」

島田 虔次

私が大地原君と始めて識りあったのは、今を去る45年のむかし、昭和22年の春のことであったと思う。静岡県清水市の郊外駒越という部落に東海大学というのが開校され、そのバラックの職員宿舎に彼が訪ねてきてくれたのである。私たち夫婦は、前年五月の予科開設と同時に赴任して来ており、彼はその一年後、英語の非常勤講師としてやって来たというわけで、たぶん学部を卒業して大学院に入ったばかり、もちろんまだ独身であった。しばらく職員宿舎に起居して授業をこなしては京都に帰ってゆくという風で、決して常駐して日々学生とつきあっていたというわけではないが、何分にも学生と年令的に近かったし、夜などしょっちゅう学生が遊びに来ていて、賑かであった。当時職員宿舎で学生の出入がもっともはげしかったのは地理の川喜田二郎君（やがてKJ法やネパール調査で有名、マグサイサイ賞受賞）の

部屋であったが、大地原君の部屋はそれに次いでいた。今の上智大学教授藤村道生君（日本史）も常連の一人であったように覚えている。

東海大学の前身は、電波専門学校、ついで航空専門学校という逡巡省傘下の理科系学校で、設立者（校長？）は松前重義氏。今日では政治家、柔道界の名士として知られるが、当時われわれが知っていたのは無装荷ケーブルの発明者たる工学博士、逡巡官僚、内村鑑三門下のクリスチャン、デンマークの国民高等学校制度に傾倒していた熱血漢的教育理想主義者…、但しあたかも公職追放中であつた。敗戦に感ずるところがあつた氏は、文科系に重点をおいた総合大学（氏のいわゆる「歴史哲学を中核とした」総合大学）の創設を決意し、専門学校とは全然別の地に先ず予科から始めたのである。松前氏の相談相手が京大の足利惇氏先生（いうまでもなく大地原君の大学での業師）であつた関係で教官は、特に文科系教官は予科長相原信作先生（三高時代の恩師）以下京都から行った人が多かつた。西洋史の兼岩正夫氏（のちに東京文理大教授）もその一人で、はじめの間は郷里の掛川から汽車で通つていた。温厚篤実の見本のような人で、病氣臥床の歳月が長かつたせいで、大学は私と同期ながら私よりは大ぶ年長であつた。大地原君の方は圭角稜々、人物批評に於いてもなかなか辛辣であつたが、その彼の兼岩氏に対する心服は大変なもので、しょっちゅう話題に上せながら、一言半句の微辞をも聞いたことがない。幼くて両親を喪つた同君は、兼岩氏を父親のように思おうとしていたのではなかつたか、私は今でも時々そういう気がする（のち、結婚のさいの仲人をたのんだ）。

何しろ時代は敗戦直後の大混乱時代であり、議論の種には事欠かず、ガランとした会議室では、来る日も来る日も甲論乙駁の論戦が展開されていた。教官の個人研究室、学科研究室というものがないので、学校に出て来た人たちはこの大会議室に腰を落ちつける以外、どうしようもなかつたのであ

る。いわんや我々にはまた、選ばれてやって来たのだ、新しい大学を創るのだ、という自負があった。これが一部の人々（意外にも自称他称のコミュニストに多かった）には逆に、たかが都落ちして来た連中、とも、学生を煽動するハタ迷惑な連中、ともうつたらしい。この喰いちがいがいろいろな問題を派生させて、結局我々の総引上げとなるのであるが、それは後の話——大地原君はどちらかという保守的な議論、たとえばデモクラシーに対する懐疑論などを展開して、舌鋒はなかなか鋭かった。三高のころ習った深瀬基寛先生ゆずりのマシュー・アーンロードが、時々顔をのぞかせたように記憶している。特に印象的であったのは彼が、現代史的な事件、つまり物心ついてから我々が新聞ラジオなどで知らされてきた重大な政治的社会的事件について実に鮮明な記憶を保持していて、議論の際縦横に言及したこと、主張には一向納得がゆかぬ場合でも、その点だけは全くシャッポをぬがされる感じであった。これは彼において後々まで変ることのなかった「特技」であって、戦後史についても、何かの大労働争議、政権交替劇、外交交渉などの顛末を、その時誰がこう云った、その時誰はこういう手を打った、と、まるでたった今新聞で（時にははるか海彼のル・モンド紙で）読んだところだといわんばかりの調子でメンションするのである。歴史家の癖に記憶力コンプレックスに悩んでいる私は、彼こそ「歴史家になるべきだった」と何度慨歎したことだろう。

私が京都へ帰って来たのが24年四月、それから半歳の失職ののちその年の暮に人文研に職を得たのであるが、その間お互に生活の為に忙しく、ひんぱんに行き来するという程ではなかった。私が北白川の人文研に個人研究室をもらってからは、彼としてもそのたまり場たる文学部図書室から程遠からぬ位置に手頃なべり場所が出来たというわけで、割合ひんぱんに訪ねてくれた。特にこのんで取り上げた話題があったわけではないが、私が高等学校が文丙出身であった関係で、フランス語のことをよく聞かれ

た。「それは多分こういう意味だろう」と云ってもなかなか勘弁してもらえず、私の一番弱い文法論に引きずり込まれて目を白黒させられた。今から考えると、よくもまあ人の悪い、あのフランス語の達人が、といまいましくなる。このあと、ガリオア留学、フランス、インド留学などがはさまり、そのうちにバリ留学どうしのアメリカ人E.S.氏を連れて来て、いわば私に押しつけた形になったが、この男はそれ以前にも以後にも見たことがないほど傲慢な男で、研究所には若い女性もたくさん居るのに、夏になると上半身裸体でのし歩いて教授会から「注意」を受けたり、古本屋店頭での執拗な値引交渉を大地原君に強要して大地原君を怒らせたりしていた。この男はバリ（シノロジーのメッカ！）でシノロジーの学位をとったことが大自慢であったのだが、我々のそれに対する敬意が不十分と感じたらしく、遂に或る日私と大衝突をしてしまった。そのことを大地原君に報告したとき、同君がどういう態度を示したかうまく思い出せないが、同君の追憶となると、どうしても此の男のことがセットになって思いうかんでくるのを禁じえないのである。この男は後年、私が病気で長期欠席中、再度研究所へ留学を申請したが、教授会から拒否せられた由である。その後の消息は誰も知らないらしい。私は、植民地経営全盛時代の白人、というと、いつもこの男のことを連想する。

こういう思い出にふけり出すときりがなくなり、全く惘然としてしまう。あまり共通点は無さそうなのに何処で気が合うのだろう、と家内がよく笑うが、万事がアバウトで確信というものを欠いている私と確信のかたまりの如き大地原君、たしかに第三者から見たらそう見えたくもされない。一度だけ口論になり同座していた奥様を慌てさせたことがある。直後にわざわざ電話をかけて来て遺憾の意を表したが、こちらはそれ程シリアスに受け取っていたわけではなかった。

私が退官して以来は、当然のことながら会う機会はうんと少なくなった。四年前、文学部博物館の開

館パーティーの席で彼が、西門からのわずかなスロープが耐えきれないほど息苦しいと云った時、以前何かの折に彼から肺気腫だときいていたのを、本気に意識せざるを得なかった。やがて私は電話——ごくたまにしかかけることはなかったが——をかけることを自らに禁ずる決心をした。それは電話口に出た彼の息づかいがあまりに切迫していて、たゞごととは思えなかったからである。一昨年春であったと思うが一度会おうではないかということになり、彼は四条寺町角の三高会館を指定して来た。それは彼が傾倒して通院していた名医某氏からの帰途に、便宜な場所であったからである。その時はとりとめもない話題を殆んど三時間ちかくもぶつづけにしゃべって別れたのであるが、最後に私がコーヒーを注文したとき、彼は缶ビールを注文して私をびっくりさせた（そう言えば会話の途中もしばしばタバコを吸っていた）。別れに臨んで、来年も此处でこうして会おうと約束したが、直前になって、とてもその気力がなさそうだ、と云って中止のハガキが来た。それで結局、十一月末の文学部名誉教授懇談会で、ということになったが、今度は私がこの会に欠席することになったのでそのことを通知した際、いずれその内こちらからお訪ねする、とつけ加えておいた。それを一日のぼしにのぼしているうち、本年二月の始め家内の方に来客が予定され、私が家に居ない方が好都合という事情があったので、それを好いきっかけに、彼を見舞うことにした。多分お宅に伺うのは二十年ぶりに近いと思うが、ベルを押しても誰も出て来ない。しばらく近所をぶらついて、も一度もどって来た時、ちょうどその時、大地原君の遺体が奥様お嬢さんお妹さんなどにまもられて、タクシーで病院から帰って来て、表にとまったのである。部屋に床をとって安置せられた彼のからだは、まだ暖かかった。

「大地原豊先生を悼む」

福井 文雅

父の三連夜の法要と身辺整理とのために妙法院に居た時に、大地原先生の訃報に接した。そこですぐ出棺に駆けつけることが出来たが、偶然とばかりは言えない身近な因縁を感じたものである。

大地原先生に初めてお逢いしたのは何時のことであったのか、今では記憶が無い。しかし、ドミエヴィル先生が日本政府の招待で来日され、京都で講演をされることになった1966年2月下旬にお会いしたことは鮮明に覚えている。「あゝ、この方があの大地上先生か」と言う感慨を持ったものである。

実は、1963年11月、パリの「ラ・クーポール」でドミエヴィル *Demiéville* 先生からルヌー *Renou* 先生と一緒に昼食を御馳走になったことがある。（ド先生は、客の接待には昼食を当てるのが例であったが、奥様亡き後は、この *La Coupole* がお気に入りのお店だった。）その時ルヌー教授は私に、ズバリと「大地原氏はサンスクリットの天才 *génie* です」と話されたのである。

従って京都でお会いした時には、あのルヌー教授が *génie* と評した方はこの人か、と言う思いが、私には先ず一番先に来たのである。勿論、京都大学の *boursiers*（フランス政府給費留学生）仲間からも令名は聞かされていた。

ド先生の御接待について意外に面倒な事が起こり、内密に電話で御相談したのであるが、私の立場に立って心配りをして下さったことが忘れられない。

先生はかなりシニカルな言い回しやパラドックスがお好きであったのではなからうか？ 日仏会館で会議中に「*nous autres campagnards*（我々のような田舎者）はですね」と言い出されたのも、その例であろうか——もう二十年以上も前の事になるので、私が何故その場にいたのかの理由も定かではなくなりましたが、あの時の先生の横顔と、周りがかなり返答に困惑した雰囲気とは思ひ出される。

先生についての思い出はまだ多いが、何と言っても、この日仏東洋学会の再建の仕事を御一緒した時のことが印象に強い。すでに本『通信』11号7頁に書いたことであるが、1983年の秋の或る日の早朝、先生と東洋文庫の門前で待ち合わせて、榎先生にお会いした。榎先生を個人的には未だ存じあげないから、と言ったような理由であった。

その後の御努力はここに改めて書くまでもない。事ある毎に細々とした御指示の手紙を頂いた。私気が利かないので、会の運営や人事などにも、多分やきもきしていられたことであろう。

実は、榎先生御急逝のあと、当時主幹であった私は責務上、大地原先生に先ず善後策をお尋ねした。それへの御返事は素直なもので、また今となっては公表しても差し支えないであろうが、「さて御照会の

件は、私も即刻念頭に上しました次第で、単刀直入、結論から申し上げます。— ここはどうしても学兄御自身に会長職を引受けて頂かねばなりません。— (中略) 私自身は100米の歩行も覚束ない身、(云々)」の文面であった。健康上の理由から「引退したい」とまで言われたが、また例の逆説だろうと聞き流し、逆に「評議員」から「顧問」になって戴き、これから一層御協力も御指導も戴かねばならない時の急逝であった。

人は意外に思われるかも知れないが、先生はしばしば私に抜刷を下さった。例えば、Lin Li-kouang の Dharma-samuccaya のサンスクリット・テキストについての御考察(1982, Torino)がそれである。Lin Li-kouang はドミエヴィル先生が終生その早世を惜しんでおられた中国人親友で、そのダルマ・サムッチャヤ(一譯が『正法念處經』)の研究は、ド先生の弟子である de Jong ド・ヨンク教授の補遺に受け継がれていることは学界周知である。そう言う因縁から、先生は抜刷を下さったに違いない。

今から思うと、つまらぬお返事を差し上げたので先生はさぞかし笑止であったろうが、先生の検討された箇所は私所有の林黎光の原本に書き込んである。

そのように、学問でも(多くは豚に真珠ではあったが)先生に恩恵を蒙っている。ふと、génie と言われた大地原先生にサンスクリットを学んでみたかったな、とさえ思う。大地原先生は怖い、厳しい先生であったらしいが、もしも先生から習っていたならば、私の研究内容もかなり変わったものに成ったかも知れない。

話は最初に戻って、私が出棺をお見送りして帰京した翌日、先生から次のようなお葉書が届いて、思わず息を呑んだ —

「告別の辞 8-2-1991

多年の呼吸障害の末に、本日13時14分、彼岸に旅立ちます。思い残す所の無い一生でした。その何れかの局面にて貴台より賜りました御厚情に、深く深く御礼申し上げます。

なお、葬送あるいは追悼の行事は、一切これを望まずと遺族に申し伝えております。

では、一足お先きに、.....

大地原 豊
(自署)

年・日時は後からの書き込みであるところから見ても、早くから覚悟の用意であったのだろう。誰にでも出来ると言う用意ではない。『中外日報』2月25日号の社説は、全面この「告別の辞」に充て、「この見事な死。否むしろ見事な生と言うべきか。」と讃えている。

前掲の『ダルマ・サムッチャヤ』研究は、「佛教に関する全ての物事に私は無関心で、且つ全くの無知であるにも拘わらず」の文(フランス語)で始まっている。しかし、先生は元来が仏門の出で、法衣を纏ったこともある、という噂を私は聞いている。告別の辞にも「彼岸に旅立ちます。」の文があり、仏教と全く無縁とは思えないが、先生が葬送あるいは追悼の行事を望まなかったのには、やはり先生

独特の深い含意があったのでは? などと想像するのである。その意味で、この様な追悼の拙文を綴ったことを、在天の靈もお許し下さるであろう。

それにしても、先生は多くの良い、優れたお弟子を持たれた。それは御葬儀の席上、はっきりと私には目撃出来たことであった。先生の私への私信には、自分の周りに優れた弟子のいる誇りと喜び、学生の進歩が嬉しいと私に語る文が、しばしば含まれていた。その方々が、多く本学会の会員である。先生が愛された本学会も、そう言う先生の愛弟子が居る限り、更に発展するに違いない。

先生には、いつまでも愛護の眼差しを我々全会員に注がれますように——改めて御冥福をお祈り申し上げます。

「大地原豊先生の 御逝去を悼む」

御牧 克己

大地原先生は、1991(平成3)年2月8日(金)午後1時14分、水無瀬のご自宅近くの丸茂病院にてお亡くなりになった。持病の肺気腫が悪化して6日に入院されたわずか2日後、急性心不全にて急逝されたのである。先生のお教えを受けたもの一人として私の心は深い悲しみに閉ざされ哀悼の言葉すらないのであるが、ここに、これまで断片的に執筆する機会があった先生のご経歴を整理して出来る限り遺漏のない形で残し、さらに先生の思い出を少し付け加えて追悼の記としたい。

大地原豊先生は、大正12(1923)年3月16日京都市にお生れになり、京都一中、三高(文科、甲類)を経て、昭和17年10月京都帝国大学文学部文学科(梵語梵文学専攻)に入学、同22年3月同大学同学部を卒業され、大学院在籍中昭和26年から同29年までガリオア人事交流計画留学生、フランス政府給費留学生、インド政府給費留学生の試験に相次いで合格され、順次アメリカ合衆国のペンシルヴェニア大学、フランスのパリ大学およびインドのプーナ大学に留学された。当時のご同僚の話では先生は「留学試験場荒らし」の異名で呼ばれておられたという。ご留

学中特にフランスでは、パリ大学のルイ・ルヌー (Louis Renou) 教授に師事してサンスクリットの文学文献の研究を開始され、生涯の研究の基礎を固められた。帰国後は関西日仏学館講師、京都大学非常勤講師、関西大学専任講師を経て、昭和32年5月京都大学文学部助教授に就任、昭和47年8月には教授に昇任して梵語学梵文学講座を担当され、昭和61年に停年退官され、名誉教授の称号を受けられた。

フランスへは上の留学を別にすれば合計三度研究留学・出講された。先づ昭和39年11月から40年4月まで説売奨学金を得て渡仏されルヌー先生との共同研究 (Kāśikā-vṛttiの仏訳注: Paris, 1960, 1962, 1967) の第三巻の出版原稿完成のため、第二回は、昭和45年11月から46年3月までオートゼチュード (École Pratique des Hautes Etudes) 第四セクションで、パーリ語の文法書 Saddaniti を講じられ、昭和60年11月から61年1月まで、コレージュ・フランス (Collège de France) でインド独白劇 (bhāṇa) Madanasamjivana を講義された。特に先生のコレージュ・フランスでの講義の様子は彼地で実際に講義に出席した中谷英明君の追悼記に詳しいことと思う。かくしてフランスを中心とした国際学術交流の大きな貢献により、昭和52年フランス政府から Palmes Académiques (Chevalier級) 勲章を受賞され、昭和59年 Société Asiatique の名誉会員に選ばれ、平成2年6月29日にはフランス学士院 (Institut de France) 碑文・文芸アカデミー (Académie des Inscriptions et Belles-lettres) の外国人客員会員 (correspondant étranger) に選ばれるという数々の栄誉に輝かれた。

先生の研究業績については、日本が世界に誇るべきインド学者と、先生がご生前口癖のように絶賛しておられ、ご逝去の最後の瞬間までその連帯意識に支えられておられたご同僚でありご親友であった東京大学名誉教授、原実先生によるネクロロジーが Indo-Iranian Journal 並びに「南アジア学会」誌に掲載される予定であり、最適任の専門家による的確且つ周到な紹介に譲りたい。ここでは、「通信」

の読者並びに専門外の読者のために、先生が残された一般向けの書物のみを紹介しておきたい。尤も、先生は生来の本格的な研究者であられたので、所謂一般向けの書物はほとんど手掛けられなかった。例えば、先生によるパーニニ文法の和訳解説のようなものを残しておいて欲しかったと思うのは恐らく私一人ではなかろうと思われるのだが、そういうことを申し上げるといつも決まって大目玉を食らうのが落ちであった。私の知る限り、先生が残されたいわゆる一般向けの書物は三点ある。第一は、中公の世界の名著2に収録された「ミリンダ王の問い」(抄訳)。第二は岩波文庫に収められた「公女マールヴィカーとアグニトラ王」。古典サンスクリット文芸の最高峰をなす Kālidāsa (4世紀末)の三劇作の内二作(いずれも本邦初訳)が擬古文調の見事な翻訳にて収められている。第三は、絶筆となったインド文学史上例の少ない政治劇、Viśākhadatta (6世紀末)作 Mudrārākṣasa の翻訳であり、「宰相ラクシャサの印章-古典サンスクリット陰謀劇-」と題して先生のお誕生日である3月16日に東海大学出版会より刊行されたばかりである。本の扉には「原実氏との久しき連帯感に立ちつつ、故辻直四郎、田中於菟彌両先生の御霊前に捧ぐ」とある。同書の再校正が6日のご入院直前に到着、二日間は病院の棚に放置してあったのを、8日の朝に物に憑かれたかのように校正を始められ一気に終わられるとお休みになられた。急逝されたのはその午後のごことであったから虫の知らせとでもいうのであったらうか。あとがきの日付は3月16日となっていて奇妙に思われる向きがあるかもしれないが、ご生前、誕生日に出版されることを希って自ら日付を記入されていた先生のご遺志を出版者の方が生かされたとのことである。この書物は大学紛争中の昭和44年、当時嵐山にあった先生のご自宅で寺子屋式に数名の学友と共に読んで頂いたものである点、私にとって特に感慨深い。

私が大地原先生に初めてお目に掛ったのは、昭和41年、初級サンスクリット文法の授業であった。

今思えばこの年の夏に先生はルヌー先生を亡くされた(昭和1966年8月18日)。先生の文法の授業は、曜日は何時だったか記憶が定かではないが、週二回、朝の第一講時目に行われていた。毎年最初の授業の時には十数名の受講者があったが、年度末には二、三名に減ってしまうのが常であったらしい。私が受講していた年も例外ではなく最初十名以上いた受講者も年末には僅か三名に減っていた。生き残り組は、当時東洋史の博士過程におられた間野英治さん(現在京都大学文学部西南アジア史講座教授)、浜田正美君(現在神戸大学文学部東洋史講座助教授)と私とであった。先生は間野さんのことを「あの年で新しい語学を始めてこれだけ出来るのはただ者ではない」と絶賛しておられた。告白すると、私や浜田君は実は最後は脱落寸前だったのであるが、その間野さんに助けられて何とか最後まで辿り着いたのである。次の年やはりこの三人のメンバーで読んで頂いた Sakuntalā の授業は凄まじかった。我々三人がいくら予習していても、我々の予習の尽きたところからさらにさらに先を先生は涼しい顔で進まれるのであった。一度くらい先生の予習しておられないところまで予習してやろうと頑張ったがこれはついに徒労に終わった。が、そうこうする内に我々はサンスクリットのドラマを読むことの楽しさと魅力に取り憑かれ初めていたのである。

先生は授業中でも普通の会話の中でも、相手に解ろうが解るまいがお構いなく、やたら外国語を、特に仏語を多用された。それに閉口して寺子屋と並行に日仏会館へ通い始めた私にある日先生は「どうせやるなら bourse をお受けなさい」と仰った。恥を明せば、当時の私の仏語力は bourse という言葉の意味すら知らない程お粗末なものであったのだが、思えば先生のこの一言が私の生涯の方向を決定する大きな要因になったと云っても過言ではない。

先生はよく、日本人は「一点突破」しかない、と仰った。先生によれば、日本人はチンパンジー、ヨーロッパ人はゴリラであって、チンパンジーがゴリラに勝てるわけがないから、全面で張り合うことは

不可能で、勝てるとすれば一点に focus して戦うほかはない、ということであったが、あれだけ語学力に恵まれ、学識広い先生が仰るこの言葉には実に迫力があつた。また、「絶えざる下克上」ということをよく口にされた。学生は常に先生を追い越すべく心がけるべきであり、先生は自分を追い越す弟子を養成することを生き甲斐とすべきだ、というのである。実際先生が育てられ、現在国の内外の第一線で活躍している多くの研究者の数がこの先生の信条を具体的に示していると云えるが、しかし、この内の幾人が真に下克上を果たし得たかについては全く確信がない。さらによく耳にしたのは「主催者意識を持って」ということであった。講演会を開くときなど常に主催者意識を持って討論をリードされ、講演会後の懇親会で一人ポツリと話題に加われない外国人留学生などが居ると先生は進んで声を掛けられ話に加わるようにし向けられた。

先生は一般にフランス礼賛派だと云えるが、単なる無批判な礼賛者ではなく、同じ土俵で徹底的に批判し同化した上での礼賛者であった。フランスから研究者を招いて演習をして頂いたことがあったが、先生も出席され、講師の先生が圧倒される程壮絶を極める白熱の議論を展開された。単なるお説拝聴式の礼賛とは余程異なることを痛感させられた。先生の日く、「大地原先生はすごいと云ってもらいたくてやったのじゃない。こういう風にやらないといけないと示すためにやったのである」と。それ以後知人の外国人研究者が、京都へ講義に行く時は沐浴をして身を清め白衣を着て行かねばならない、と冗談とも本気ともつかない顔で云うのに出合った時は実に愉快であった。

先生はあの細いお身体の何処にそんな力があるのかと思われる程の勇氣と信念を持っておられた。大学紛争の時、衝突寸前の二派のデモ隊の間に割って入って衝突を回避させようとしたことがあった。また、機動隊に逮捕される寸前だった教え子の学生に飛びついて逮捕から救われたこともある。四階の研究室で行われていたN先生の授業に対する妨害を

廊下で一手に引き受けて制されたこともある。教授会押しかけ団交の時2時間10分にわたる演説をぶって学生達を呆れさせたことや紛争中の壁の落書きに「沈黙は教授への道-X」などと諸教授の頭文字と共に書かれた揶揄の中に見出された「沈黙は不可能-O」というのは紛れもなく先生を指して書かれたものであることなど当時を知る者達の間では今でも語り草になっている。

先生は毒舌家で人物批評なども特に辛辣であったが、その一方で、実に浪速節的な暖かさを持っておられた。私の一年後輩に当る今は亡き土橋恭秀君がインド留学から帰って来た時、すぐに就職がない彼が可愛そうだといってわざわざ空港まで迎えに出られた。また、彼の遺稿を立派な論文に仕上げた国際サンスクリット学会誌 *Indologica Taurinensia* 10 (1984)に掲載された。こういう細かいいたるところに我々は先生の教え子に対する暖かいいたわりと深い愛情を強く感じたのである。

しかし、先生には変におせっかいなところもあった。フランス留学の試験を受ける前、先生はインド学の先生方の推薦状と並んでドミエビル先生の推薦状をももらって下さった。私のド先生に対するお礼の手紙は友人のフランス人 *agrégé* に直してもらったので大変立派なフランス語になっていたそうで、その旨誉めて下さったド先生のお便りに先生は早速返事され、「あの手紙は *agrégé* が直したから立派なので、本人の仏語はまだ実に下手くそである」旨伝えられた。同時に私にもその旨伝えられ、「あなたが向こうへ行ってから困るといけないから本当のことを伝えておきましたよ」と仰った。私は感謝の気持ちと「余計なことを！」という気持ちの交錯した実に複雑な心境であった。

2月18日の午後、大学で庶務掛から先生のご逝去の報を受け、動転した頭で即刻お宅へ電話すると電話口に島田先生が出られた。さすがは島田先生、もう駆け付けられたかと思いの外、事実ほもっと劇的であって、島田先生ご自身の「追憶」に詳しい。ご遺言によると、葬儀・告別式は行わないとのこと。

為すべきことと為すべきでないことがキチンと整理されて庶務掛とご遺族とに残されており、残った者に負担をかけないという先生のいたわりと個人主義とが徹底しているように思われた。とりあえず駆け付けて、何かしたいが何をしてよいか解らないというなんともやるせない我々の気持ちは、私の常々尊敬する友人の支那学者が中外日報(91.2.25)に見事に代弁して下さっているので参照願いたい。

私は仏教学を専門とする者であり、大地原先生のご専門からは傍系になる。専門の領域に於ては、大地原先生に優るとも劣らない秀れた師匠に恵まれたのではあるが、しかし、もし大地原先生に出合わなかったとしたら、今日の私は存在しなかっただろうと思う。専門家ばかりでなく専門家以外にも多くの影響を残されたこの偉大な *maitre spirituel* のご霊前に深く額づき、この身に受けた恩を深く謝しつつ、ご冥福を祈るのみである。

「大地原豊先生を偲ぶ」

中谷 英明

一

大地原豊先生は、本年二月八日、肺気腫のため逝去された。学問一筋に邁進なさり、六十七才のむしろ短いご一生のうちに稀に見る大きな足跡を残して倉卒として逝かれた。二十年以上に亘って親しく教えを受けた者としては万感胸に迫って言葉もないのであるが、思い浮かぶままに先生のご足跡の一端を綴って永別の言葉としたい。

先生のご専門は、古代インドの文典家パーニニ(紀元前四～五世紀)の著したサンスクリット文典 "*Aṣṭādhyāyī*"、ならびにその全体に対する最古の直接注釈 "*Kāśikā-vṛtti*" のご研究であった。言うまでもなく「パーニニ文法」は、「ヴェーダ文献」と双璧を成す古典インド文化の精華である。その一方の壁に日本人として初めて挑戦され、そして国際学界全体を通じて前人未踏の高みを極められた。古代インド人が言

語分析において見せた冴えた手腕は、先生の人並はずれた情熱と能力によって初めて解き明かされたと言えるだろう。

二

先生は若き日、1951年よりガリオア人事交流計画によってペンシルヴェニア大学（アメリカ）フランス政府給費留学生としてパリ大学（フランス）、インド政府給費留学生としてブーナ大学（インド）に各一年間、三年間の留学を果たされた。ペンシルヴェニアではN. ブラウン、S. K. チャタジー、パリではL. ルヌーという斯学の泰斗に師事され、またブーナではR. N. ダンデカル、C. R. デシュバンデ等の先輩、友人を得られた。真摯なお人柄と抜群の知力によってこれらの学匠に深い印象を与えて帰国され、亡くなるまで交流を大切にされた。

就中L. ルヌー教授に対するご敬慕は格別であった。それまでカーヴィヤ（美文詩）の解説を志しておられた先生は、同教授との出会いによって「文法学」という天職を見いだされたのである。ルヌー教授を二十世紀随一のインド学者として尊敬され、一方ルヌー教授も先生を「天性の文法学者」と高く評価し、大地原先生のような弟子を持たれたことが生涯の喜びであったと告げておられる。このような両者の理想的師弟関係は、大地原先生が大切に保管されたルヌー教授からの二百通になんなんとする夥しい書翰につぶさに伺うことができる。

先生の文法学研究は、もちろん現代インドのバンディット迄連綿する土着文法の伝統を無視することはなく、現存する全ての注釈書を参照して考慮に入れるものである。その限りにおいて自ら称揚された「インド学の正道」を歩まれた。ここにはルヌー教授直伝のフランス・インド学、さらに言えば十九世紀に大成された西洋古典文献学の手堅い批判の手法を認めることができる。

しかし先生の学問の最大の特徴はここに留まらず更に一步を進められたことであろう。決して土着注の正確な理解のみで事足れりとはなさ

らなかったのである。パーニニ没後二千数百年の伝承を経た写本はもとより、数世紀、場合によっては一千年紀の後に世に出た諸注釈家にとってもまた、当初の体系が既に部分的損壊・歪曲を来していることがあり、その際に彼らが付した様々な糊塗や牽強付会を見抜いて体系本来の精緻を明かすこと、このことに先生は情熱を傾けられたのである。この「真実発見の喜び」を欠く研究には、それがいかに大がかりであっても決して価値を認められなかった。

これは東大動物学のご出身で、インド古代医学書『スシュルタ』の和訳を完成されたご父君大地原誠玄氏の薫陶によるものかも知れない。土着注釈を頼りに医学書に見える植物の同定に心血を注がれた誠玄氏自身も、当時の日本のインド学者の水準を抜いておられたのであるが、同定成功の喜びを幼い子息に繰り返して語られたという。

三

1954年、米・欧・印の三大陸を廻って帰国された先生の目には、京都のインド学における国際的視野の欠如が余程大きく映じたい。東大の辻直四郎先生と出会うためには、地球を一周して来なければならなかったとよく嘆息された。辻先生との対面は東京日仏会館学長として赴任されたルヌー教授の仲介によって初めて実現したのである。

京都を世界の田舎にしてはならないと考えられた先生は、学生の育成にも心を砕かれた。帰国早々、服部正明、梶山雄一両先生らと語り、京都大学の梵文学、印度哲学、仏教学の三講座をを一つとする「インド学教室」を成立せしめ、学生を世界の主要なインド学者のもとに次々と送り出された——D.H.H. INGALLS (Harvard), van BUITENEN (Chicago), D. PINGREE (Brown), S.K. CHATTERJI (Calcutta), H. BERGER (Heidelberg), W. RAU (Marburg), K. HOFFMANN (Erlangen), J.D.M. DERRETT (London), C. CAILLAT, K. BHATTACHARYA, P. FILLIOZAT (Paris)。その結果、これら各専門において国際学界をリ-

ドする学者のもとで博士号を得て帰った学生だけでも十指に余る。

殊に先生が親密な交流をお持ちになったパリからは五名のPH.D.が輩出し、うち三名が博士論文をコレージュ・ド・フランスから出版した。これらの数字は、インド学という弱小の学問領域においては世界的に見て決して小さなものではなかろう。こうして先生の晩年には世界中のインド学に関する情報が、日々先生のもとに寄せられるように違なったのである。

学生に対しては大変厳しかった。演習での和訳には繊細な正確さを求められ、完膚無きまでに正されたから学生の緊張は常に極に達した。また論文発表、留学生試験、PH.D.取得、その出版と学生に次々高いハードルを示された。私は先生から数々のお叱りを受けたが、その最初のものであるソ連人学者が京都で講演を行ったときであった。それは加藤九祚先生の巧みな通訳付きで、講演後私ともう一人の学生が気軽に日本語で質問したが、これが先生の逆鱗に触れた。「加藤先生の教養を何と心得る。」二人は憤怒も顕な先生から一喝された。拙なくとも英語で食い下がる気概がないとは何事かというわけである。

四

ご自身の海外におけるご活躍にも勿論人を瞠目させるものがあつた。'64年に"Kāśikā-vṛtti"執筆のため半年滞仏なされたのを皮切りに、'70年末から翌年にかけてはフランス外務省及びC. N. R. S.の招待によって三ヶ月間滞仏され、パリ文法"Sad-da-nīti"を講じられた。'77年にはパリの国際サンスクリット学会で発表された。この折りの発表は、あるヴェーダ語形をめぐる当時の幹事長R. N. ダンデカル氏の説を否定するものであつたにも拘らず、当のダンデカル氏が激賞し、その推挙によって先生は同学会の副会長に選出されなされた。'85年にはコレージュ・ド・フランスに招かれ、一ヶ月間連続講演をされた。'77年と'85年には私も偶々ご講筵に列することができたが、それは技巧的フランス語

を自在に駆使したみごとなもので、パリの学者も賛辞を惜しまなかつた。

五

"Kāśikā-vṛtti"研究は1967年に第三巻を出して以降、お続けにならなかつた。それまで維持された水準が余りにも高く、継続不可能と判断なされたのである。ルヌー先生が'66年に急死なされたこともあつたのかも知れない。

ここで先生がこれ以後続けられた仕事に言及するに当って私事に亙ることをお許し願えば、'69年の大学紛争さ中に先生から手交頂いたのが、林藝光の遺稿をドミエヴィル、ルヌー両先生らが整理・出版された仏教詩集"Dharmasamuccaya"第一巻であつた。私はこれを材料に半年足らずで何とか卒業論文らしきものを書き上げることができた。

この"Dharmasamuccaya"の研究をその後先生はご自分の「頭の体操」となされたのである。昨夏迄二十年間、私が二度に亙って滞仏した都合七年を除いて、そのサンスクリット文の見直し作業を継続された。毎週金曜の午後三、四時間、韻律やチベット訳を調べてお相手をしたが、苦心の末に想到された各詩の復元原形をお示しになるのを私はただ拝聴するばかりであつた。

先生は並外れて豊かな感性を持っておられた。サンスクリット詩の一篇であろうと日常些事であろうとすべてこの一筋の感性によって綴られた経験が、さながらモナドの如く整然と脳中に響き合っていたから、ある一事を思い出されるのに途方もないところから想起を開始され、次々記憶の糸を辿って全てを昨日のこつのように語られることができた。"Dharmasamuccaya"研究においても、この超人的記憶の威力を十分發揮されたことは言うまでもない。

六

1977年に Palmes Académiques (Chevalier) 章をお受けになり、'84年にはSociété Asiatiqueの名誉会員となられ、'86年京都大学を定年退官なされた。定年後の先生は悠々自適の身となられ、'89年に『公女マーラヴィカーとアグニ

ミトラ王』、今春には『宰相ラクシャサの印章』という二編の戯曲和訳を上梓された。

ご定年後には学術的な最後の大作として、'88年京都で開かれた第五回日仏学術シンポジウム「中央アジア諸言語文書」の実現に尽力された。故羽田明先生とお二人で呼びかけ人となられ、関西在住の anciens boursiers 全ての参加を求めて開催されたこの会議は、発表・討論の大半をフランス語で行うという快挙であったが、日本側発言の過半は先生のものであった。

このシンポジウムの会議録 ("Documents et archives provenant de l'Asie Centrale") も昨年刊行され、その頃先生は「"Dharmasamuccaya" が終章迄完了すれば思い残すことはない。」と洩らされた。それも昨夏に脱稿し、今は校正刷りがローザンヌから返送されて来るのを心待ちにしておられたのである。大した貢献もないまま共著者として頂いてきた私は、時には辛いこともあったが今後お相手することがないかと思うとやはり寂しい。

一つご付託が残っている。先生がルヌー教授の親書を何よりも大切になさっていたことは先に少し触れたが、昨年末これらのコピーを作り、オリジナルをパリのインド文明研究所の保管に託するよう願われた。正月早々お宅に伺って受け取るようになっていたが急に体調を崩され、遂に機会を逸した。早々にご指示を実現したいと思う。

先生はあらゆる機会を通じて理想とするべきところを力強く示された。それはいつしか学問に対する私たちの心構えの根幹となったように思われる。先生の精神は多くの弟子において今も脈々と生きているのである。そのご遺志に沿って、今後も微力を尽くして行きたい。最後に、先生を師とする事が出来たことを大変幸せであったと思う。 *Que l'âme de mon maître repose en paix!*

学界消息〔タイ〕

ロベール・ランガ先生以後

石井 米雄

Les sources du droit dans le système traditionnel de l'Inde (Paris, 1967) の著者故ロベール・ランガ先生は一般には古代インド法学者として知られているが、われわれ東南アジア研究者にとっては東南アジア伝統法研究の権威といったほうが通りがよい。とりわけタイの伝統法研究はこれまでほとんどランガ先生の一人舞台であったといっても過言ではない。ランガ先生と言ったが筆者は先生から直接大学等で教えを受けた者ではない。しかし四半世紀もまえにアメリカの雑誌に投稿したタイのサンガ法に関する論考の仏訳を Documentations Françaises で読んだとあって励ましのお手紙を頂戴して以来、ひそかに師と仰いでいるのでこう呼ばせていただくことにする。

今日タイの伝統法は1805年に現ラタナコーシン王朝の始祖ラーマ一世王の勅命によって編纂された「三印法典」という形で伝わっている。この書物の原写本は編纂後正本が3組、副本が1組、計4組作成されたことが知られているが、散逸して久しくその行方がわからなかった。1908年、その一部がある者の手で某国の外交官に売却されようとして発覚した事件を契機として政府機関による組織的探査が始まり、回収された各種の写本をつなぎあわせてようやく写本の全貌があきらかとなった。1920年代末から30年代にかけて、ジャン・ビュルネ、ロベール・ランガというふたりのフランス人学者の手で、「三印法典」の校訂本作成の作業が開始され、1938年、バンコクのタマサート大学から出版された。これが今日もっとも権威のある「三印法典」のテキストとして広く利用されている「タマサート大学本三印法典」である。筆者は昨年タイの歴史学者と日本のコンピュータ専門家の協力を得てこの刊本をテキストとした「三印法典のコンピュータ索引」

全5巻を完成し、バンコクで出版した:

Ishii, Shibayama, Aroonrut(eds.), *The Computer Concordance to the Law of the Three Seals*, Bangkok: Amarin Publications, 1990.

ランガ先生は、「三印法典」というテキストを用いてすくなくとも15編の論文を著している。ただ英語で書かれた2・3編の論文を除くと、非フランス語圏においてその先駆的業績の利用されることがすくないのがまことに残念である。しかしランガ先生のタマサート大学での講義をもとに出版された「タイ法制史 全2巻」の価値はタイ国内においてきわめて高い評価を受け近年再版されたことは喜ばしい。同書は「三印法典」のテキスト研究をきっちりともふまえたほとんど唯一の「タイ法制史」である。

これまた残念なことながら、ランガ先生によって築かれた「三印法典」研究はタイ国内、国外を含めほとんどその後継者を見いだしていない。それは「三印法典」という資料の価値が、一般にまだ十分に認識されていないことと無関係ではない。その意味で「三印法典」をもちいてタイの賦役労働制研究の道をひらいた故カチョン・スカパーニット教授や、その議論をさらに精密化した社会学者アキン博士のような例外的学者の存在は貴重である。旧暹タイの文化庁にあたる国家文化委員会が、前述した筆者らの「索引」出版を記念して「《三印法典》とタイ社会」というシンポジウムをバンコクで開催したが、その会場にランガ先生の大きな写真が飾られていたのはさすがと関心した。このシンポジウムでは歴史学、人類学、民族学、法制史など各分野から「三印法典」とその意義をめぐる報告があった。報告書は目下国家文化委員会の手で編集中と聞くが、これが出版されたならば、ランガ先生によって先鞭をつけられた「三印法典」研究の重要性が、タイの伝統国家、伝統社会に関心を寄せる幅広い研究者によって再確認されることになるものと期待されているが、できることならその一本を南モンパルナッス墓地に眠る先生の墓前に捧げ、先生のお仕事がよくやくタイで芽をふき始めましたと報告したい気持ちでいっぱいである。

第6回日仏学術シンポジウム【パリ・9/23~27】

「諸地域文化への 仏教の適応」

プログラム

報告 中谷 英明

三年に亘って準備されてきた日仏学術シンポジウム「諸地域文化への仏教の適応」もいよいよ一月後に迫り、そのプログラムが明らかとなったのでここに紹介したい。9月23日から27日までコレージュ・ド・フランスで開催される会議に於ける発表は、フランス側15件、日本側9件の合計24件が予定されている。詳細は次の通り。

なおこの他、別記のように9月23日(月)には中国学関係の、また25日(水)には仏教学関係の会議が(今回のシンポジウムとは別に)開催されることとなっている。また9名の方が日本からオブザーヴァーとして参加される。

9月23日(月)

レセプション

開会式

秋山光和 "Un exemple d'adaptation de l'art bouddhique à la sensibilité japonaise: la descente d'Amida (Amitābha) dans le paysage local".

9月24日(火)

Gérard FUSSMAN "L'implantation du bouddhisme au Gandhāra".

中谷 英明 "Les localités discernables dans les vers bouddhiques anciens".

Anne VERGATI "Bouddhisme et caste dans la vallée de Kathmandou".

Mohan WIJAYARATNE "Rites funéraires des bouddhistes cinghalais".

Georges-Jean PINAULT "Diffusion et adaptation des récits édifiants du bouddhisme d'après les textes tokhariens: narration prosimétrique et version dramatisée".

庄垣内正弘 "La diffusion des termes bouddhiques chez les Turcs".

夕刻: Société Asiatique 訪問・レセプション(フランス人文科学アカデミー常任書記Jean LECLANT氏主催)

9月25日(水)

Yoshiro IMAEDA "La bouddhisiation du Tibet: l'adaptation du vocabulaire et des concepts bouddhiques indiens dans les manuscrits de Dunhuang".

御牧克己 "Doxographie tibétaine".

高田時雄 "Le rouleau long chinois en écriture tibétaine de Dunhuang sur le dhyāna bouddhique".

Pierre MAGNIN "Les prières avec éloges en faveur de l'Empereur et des fonctionnaires dans certains manuscrits de Dunhuang".

福井文雅 "La fonction bouddhique des song (strophes) dans la littérature taoïste".

KUO Li-Ying "Autour d'un sūtra apocryphe chinois sur la divination du karma".

京戸慧光 "Etude des sūtra apocryphes chinois".

Louis GABAUDE "Bouddhisme thaï et culture moderne".

François BIZOT "L'embryologie et les descriptions traditionnelles du dhammakāya au Cambodge".

9月26日(木)

坪井善明 "Les études sud-asiatiques au Japon touchant en particulier le Bouddhisme".

山折哲雄 "Syncretic relationship between Shintō and Buddhism".

François MACÉ "Le Gengenshū, ouvrage shintō synchrétique".

Robert DUQUENNE "Quelques exemples japonais d'acculturation du bouddhisme".

François GIRARD "Zennyō: les avatars de la femme dragaon".

Hartmut O. ROTERMUND "Un exemple de syncrétisme japonais: la chass à la bouddhèité".

Bernard FRANK "Amour, colère, couleur: variations sur Aizen-myōō".

夕刻 レセプション(於フォンダシオン・ユゴー)

9月27日(金)

フランク教授の案内によってギメ博物館見学
シャンティール城博物館見学
レセプション(フランス学士院主催)

中国学会議 9/23(月)

前田繁樹 "Syncretism of Taoism and Buddhism in Jiang-nan 江南 in the 4th Century."

三浦国雄 "A Mutual Interchange among Buddhism, Confucianism and Taoism in Mt. Tian-tai 天台山."

坂出祥伸 "Sun Si-miao 遯思貌 et le Bouddhism."

田中文雄 "The Development of the Esoteric Buddhist Liturgy in China."

山田利明 "The Repercussions of Buddhism at Lingpao-Purification 靈寶齋."

仏教学会議 9/25(水)

加藤純章 "Les Sautāntika: traduction fluctuante — absence de l'école de ce nom, mais présence de maîtres à titre individuel."

津田真一 "How does the Buddhism necessitate the monotheistic idea of the God?"

オブザーヴァー参加者(abc順・敬称略)

石沢良昭、鹿島有希子、加藤栄一、遊佐昇、
宮沢正順、森由利亜、成瀬良徳、砂山稔、
山田均

新刊紹介(中国)

銭林森編 『牧女与蚕娘』

興膳 宏

銭林森編『牧女与蚕娘』(羊飼いのむすめと桑摘みの女) - フランス・シノログの中国古典詩論集 上海古籍出版社刊・1990年(383頁)

フランスの中国研究が長い歴史を持つことについては、中国でもすでに周知の事実だが、その成果が

漢訳されて中国に紹介された先例となると、きわめて寥々たるものである。その意味で、「南京大学古典文献研究所専刊」の一冊として本書が刊行されたことには、まことに大きな意義がある。中国の学界が、自国の文化に対する外国人の研究にも目を開くようになった現状を顕著に示す出版として、十分な注目に値しよう。

編者の銭林森氏によると、この書の構想は、1984年春、折からパリ第三大学に出講中であった同氏によって立てられ、フランスの中国学者たちの協力を得て編纂が進められた。収められた九人の学者の執筆になる十五篇の論文は、フランスの学者の助言にもとづいて選択されており、その点でいわば中仏両国学者の共同編集の性格を帯びている。選択の原則は、フランスにおける中国古典詩研究の歴史を示すとともに、最新の研究成果を代表するもの、また内容の多様性と同時に、視角や方法論の多様性をも反映するようなものということであり、中国の読者に見てフランスでの研究の全貌をほぼうかがわせることのできるような配慮がなされている。全書の構成を次に示しておこう。(論文の題目は、すべて漢訳によるが、必ずしもその忠実な訳ではない。また論文の番号は、筆者が仮りに付したもの)

- 序 程千帆(南京大学古典文献研究所所長)
 序 ドナルド・ホルツマン
 序 ジャン＝ピエール・ディエニ
 1 中国の詩歌芸術 エルヴェイ・サン・ドニ
 2 中国古典詩歌の三つの時期 カミーユ・アン
 ボー＝ユアール
 3 中国古典詩概論 ポール・ドミエヴィル
 4 禪と中国の詩歌 ポール・ドミエヴィル
 5 中国の文学に描かれる山 ポール・ドミエ
 ヴィル
 6 『詩経』の恋の詩 マルセル・グラネ
 7 屈原論二篇 フェレンツ・テーケー
 『離騷』の悲歌理論への貢献
 屈原詩派とその中国の詩歌への影響
 8 羊飼いのむすめと桑摘みの女 ジャン＝ピエ
 ール・ディエニ
 9 「古詩十九首」について ジャン＝ピエール
 ・ディエニ

- 10 「七哀」考 - 曹植の「本辞」と「晋楽」の歌
 辞をめぐって ジャン＝ピエール・ディ
 エニ
 11 阮籍論二篇 ドナルド・ホルツマン
 不老長生の追求
 神秘主義
 12 「春江花月夜」の内容と形式 程紀賢
 13 李商陰の詩歌における短題詩 イヴ・エル
 ヴェット
 訳者後記 銭林森

7のテーケー氏がハンガリーの学者であるのを除けば、すべて十九世紀半ばから現代に至るまでの中国文学研究を代表する顔ぶれが網羅されているといえてよい。内容面でいうと、1から5までが総論的な性格を持つのにたいして、6から12までは個別の作家・作品論によって構成するといった工夫もみられる。

1のサン・ドニ侯爵(1823-1892)スタニスラス・ジュリアンに次いでコレージュ・ド・フランス教授になった人で、始めて中国古典詩をフランスに紹介したことで知られる。その唐詩の翻訳。Poésies de l'époque des Thang は、1862年に出版されており、1977年に新版がでた。本書所収の論文は、その序言の一部である。2のアンボー＝ユアール(1857-1897)は、中国福領事を務めたこともある外交官で、袁枚の研究でことに有名だが、この文章はLa poésie chinoise du XIVe au XIXe siècle(1886)の前言から取ったもの。この二人が十九世紀の人で、他はみな今世紀に入って活躍した、あるいは現在も活躍中の入ばかりである。日本でもよく知られた名前が多い。

その中で年代的に最も早いのはマルセル・グラネ(1884-1940)で、その名著 Fêtes et chansons anciennes de la Chine(1919)は、わが国でも内田智雄氏の翻訳があつて、現在なお読まれているが(『中国古代の祭礼と歌謡』)、6は原著の一部を訳出している。なおこの書の全訳は、『中国古代の祭礼と歌謡』と題して、1989年に出版された。(張銘遠訳、上海文芸出版社刊)

グラネに次ぐドミエヴィル(1894-1979)は、現代のフランス・シノロジーの宗師ともいうべ

き存在で、3は彼が第一線の研究者を動員して編んだ Anthologie de la poésie chinoise classique (1962)の序言であり、ヨーロッパ文明の立場から見た中国古典詩の特質を巧みに説明している。

ディエニ、ホルツマン、エルヴェットの三氏は、いずれもドミエヴィル氏の学統に連なる現役の学者である。三氏それぞれに特色ある学風を以て聞こえるが、ディエニ氏の「古詩十九首」、ホルツマン氏の阮籍・嵇康、エルツマン氏の司馬相如に関する研究はつとに定評がある。ディエニ論文のうち、本書のタイトルともなった8の Pastourelles et magnanarelles (1977)は、中国の古歌謡「陌上桑」とフランス中世の牧歌を比較文学の方法論を用いて分析・考証した労作で、新鮮な問題提起に満ちている。こうした研究方法に対する中国の学者の関心の強さが、この論題を書名に選んだ事実にも暗示されるようである。程紀賢氏はフランスの中国文学者で、構造主義論を用いた鋭利な詩論を特色とする。

巻末に付された錢森林氏の後紀は、フランスにおける中国古典詩研究の流れを跡づけて、示唆に富む。ドミエヴィル氏の「フランスにおけるシナ学研究の歴史的展望」(『東方学』33・34、原文は Acta Asiatica 11,1966)などと併せ読むことによって、フランス・シノロジーへの理解を深める一助となるであろう。本書に示されるようなフランス人学者の研究手法に対して、中国の学者がどのような反応を示すか、期待を以て注目したい。

1991、3、6

フランス書

最新号の目次

— フランスの雑誌から —

1. Journal Asiatique

tome CCLXXVIII 3-4(1990)

担当 御牧 克己

論文

A. Roçu, Jeannine Auboyer (1912-1990). (ジャ

ニンヌ・オーボワイエ追悼録)

- S. Sroumsa, Shlomo Pinès: le savant, le sage.
(追悼録: 学者/賢者シュロモ・ピネ)
- Fr. Grillot-Susini, Les textes de fondation du palais de Suse. (スーサの宮殿建設の諸テクスト)
- M. Bernand, Al-Ghazāli, artisan de la fusion des systèmes de pensée. (思想体系融合術の天才アル・ガザール)
- J. Šamić, Traditions et mœurs des derviches de Bosnie (Yougoslavie). Aspect socio-culturel.
(ユーゴスラビアのボスニアの回教僧達の伝統と風習: 社会・文化的側面)
- Ch. Bouy, Matériaux pour servir aux études upanišadiques. II. La Rāmatāpinyupanišad. (ウパニシャッド研究資料. (II) ラーマターピニー・ウパニシャッド)
- C. Clémentin-Ojha, La renaissance du Nimbārka sampradāya au XV^e siècle. Contribution à l'étude d'une secte Kṛṣṇaite. (十六世紀に於けるニムバルカ派の宗教実践の復興: クリシュナ派の一宗派研究への寄与)
- M. Soymié, Observations sur les caractères interdits en Chine. (中国に於ける避諱字の考察)

2. Etudes Chinoises

vol.IX-1(1990)

担当 興膳 宏

論文

- Thierry Pairault, Approches tontinière(première partie): de la France à la Chine par la Cochinchine et autres lieux. (トンチン年金の研究(1) - フランスからコーチ・シナ等を経て中国へ)
- Chridtian Lamouroux, Espace et peuplement dans la Chine des Song: la géographie du bassin de la Huai au XI^e siècle. (宋代中国の土地と人口 - 十一世紀河淮流域の地理)

評論

- Jean-François Billeter, Comment lire Wang Fuzhi? (王夫之をいかに読むか) Jean-Pierre Diény, Mythologie et sinologie. (神話学と中国学)

書評

- Jacques Guillermaz, Une vie pour la Chine. Mémoires, 1937-1989. par John K. Fairbank.
- Dominique Liabeuf et Jorge Svartzman (eds.), L'oeuil du consul. Auguste François en Chine (1896-1904). par Christine Nguyen
- Jacqueline Thévenet, Le lama d'Occident. Évariste Huc, de la France en Tartarie et du Tibet en Chine, 1813-1860. par Françoise Aubin
- Pierre-Antonie Donnet, Tibet mort ou vif. par Françoise Aubin
- Janice Stockard, Daughters of the Canton delta: marriage patterns and economic strategies in South China, 1860-1930. par Isabelle Thireau
- Marie-Claire Bergère, Lucien Bianco, Jürgen Domes(eds.), La Chine au XXe siècle, première partie: D'une révolution à l'autre(1895-1949) par Alain Roux
- Patrice de Beer, La Chine, le réveil du dragon. par Jean-Pierre Cabestan
- Pierre Gentelle(ed.), L'état de la Chine. par Jacques Guillermaz
- Wu Hung, The Wu Liang Shrine: the ideology of early Chinese pictorial art. par Michèle Pizzoli-t'Serstevens
- Jean-François Billeter, L'art chinois de l'écriture. par Léon Vandermeersch
- Shuen-fu Lin et Stephen Owen(eds.), The vitality of the lyric voice: shih poetry from the late Han to the T'ang. par Donald Holzman
- Anne D. Birdwhistell, Transition to neo-Confucianism: Shao Yung on Knowledge and symbols of reality. par Anne Cheng
- Claudine Salmon(ed.), Literary migrations. Traditional Chinese fiction in Asia(17-20th centuries). par Françoise Aubin
- Patrick Carré, Le Palais des nuages.; Jean Lévy, Le rêve de Confucius. par André Lévy
- A. Giacomi et al., Lexique français-chinois de

la physique. par Georges Métaillie

新刊紹介

- Lao She, Un fils tombé du ciel. trad. Lu Fujun et Christine Hel. par Paul Baddy
- Pa Kin, Autonne. trad. Edith Simard-Dauverd. par Paul Bady
- Zhang Jie, Galère. trad. Michel Cartier et Zhi-tang Drocourt. par Anne Curien
- Zhang Xinxin, Le courrier des bandits, trad. Emmanuelle Pèchenart et Robin Setton. par Annie Curien

Bibliographie 1989 (文献目録)

追悼文

- Kwong Xing Foon 慶欽(1944-1990) par Jean-Pierre Diény

3. 馮 幸 辰 T'oung Pao

vol. LXXV. Livrs. 4-5

担当 高田 時雄

論文

- Wang Hsiu-huei, Vingt-sept récits retrouvés du Yijian zhi. (夷堅志に見える二十七の物語)
- Wong Siu-kit 黃兆傑 and Lee Kar-shui 李家樹, Poems of Depravity: a twelfth century dispute on the moral character of the Book of Songs. (淫詩: 詩經の道德性に關する十二世紀の議論)
- G. Arbuckle, A note on the authenticity of the Chunqiu Fanlu 春秋繁露. The Date of Chunqiu-fanlu chapter 73 Shan Chuan song 山川頌. (春秋繁露真偽考、その第七十三山川頌の年代)
- James M. Hargett, Playing Second Fiddle: the Luan-bird in Early and Medieval Chinese Literature. (第二ヴァイオリンの演奏: 古代中世中國文學における鸞)

書評論文

- Rafe de Crespigny, The First Empires of China. (最初の中華帝國), John K. Fairbank & Michael Loewe, eds., The Cambridge History of China, Vol. I: The Ch'in and Han Empires, 221 B.C.-A.D. 220 に對する書評)

W. L. Idema, Some Recent Studies of Chinese Poetics. (中國詩に關する最近の研究), 1) James J. Y. Liu, Language, Paradoxe, Poetics. A Chinese Perspective; 2) François Jullien, La valeur allusive. Des catégories originales de l'interprétation poétique dans la tradition chinoise; 3) Günther Debon, Chinesische Dichtung, Geschichte, Struktur, Theorie; 4) Mein Weg verliert sich fern in weissen Wolken. Chinesische Lyrik aus drei Jahrtausenden. Eine Anthologie, Übersetzt und erläutert von Günther Debon に対する書評)

書評

Pauline Yu, The Reading of Imagery in the Chinese Poetic Tradition, par W. L. Idema
Stuart R. Schram, ed., The Scope of State Power in China, par A. J. Saich
Silvia Freiin Ebner von Eschenbach, Die Entwicklung der Wasserwirtschaft im südosten China in der Südlichen Sung-Zeit anhand einer Fallstudie, par E. B. Vermeer
Roderich Ptak & Siegfried Englert, herausg., Ganz allmählich: Aufsätze zur ostasiatischen Literatur, insbesondere zur chinesischen Lyrik, par J.-P. Diény
Reinhard Kummerich, Li Ao (ca. 772-ca. 841), ein chinesisches Gelehrtenleben, par William H. Nienhauser, Jr.
R. Kent Guy, The Emperor's Four Treasuries, Scholars and State in the Late Ch' ien-lung Era, par W. L. Idema
Stanley Weinstein, Buddhism under the T' ang, par Antonino Forte
Claudine Salmon, ed., Literary Migrations, par André Lévy

文庫 幸辰 T' oung Pao, Vol. LXXVI, Livr. 1-3

論文

Florence Hu-Sterk, Sémantique musicale et tradition chinoise: une controverse millénaire autour d'un poème de Han Yu. (音楽論と中國の傳統: 韓愈詩をめぐる千年の論争)

Allen J. Chun, Conceptions of Kinship and Kingship in Classical Chou China. (周代における親族と宗の概念)

Serge Franzini, Un texte médical disparu en Chine depuis le XVIIe siècle conservé à la Bibliothèque Nationale de Paris: le Maijue Zhengyi 脈訣正義 de Ma Shi 馬蒔. (十七世紀以来中國で佚書とされていた國立圖書館所蔵の醫學書: 馬蒔の脈訣正義)

Françoise Lauwaert, Comptes des dieux, calculs des hommes: essai sur la notion de rétribution dans les contes en langue vulgaire du 17e siècle. (神の計算、人の勘定: 十七世紀の話本小说における應報の概念について)

書評

Andrew H. Plaks, The four Masterwoks of the Ming Novel Ssu ta ch' i-shu, par André Lévy
Michèle Pirrazzoli-T' serstevens (ed.), Le Yuan-mingyuan, Jeux d'eau et palais européens du XVIIIe siècle à la cour de Chine, par Alain Thote
A Selective Guide to Chinese Literature 1900-1949, Vol. I: The Novel, edited by Milena Doleželová-Velingerová; Vol. II: The Short Story, edited by Zbignew Slupski, par Anne Sytske Keyser
S. Robert Ramsey, The Language of China; Jerry Norman, Chinese, par Jeroen Wiedenhof
Dore J. Levy, Chinese Narrative Poetry, the Late Han through T' ang Dynasties, par W. L. Idema
Chih-p' ing Chou, Yüan Hung-tao and the Kung-an School, par W. L. Idema
Patrick Hanan, The Invention of Li Yu, par W. L. Idema
Anne Birrell, Popular Songs and Ballads of Han China, J.-P. Diény

会員消息

原 実氏、スウェーデン 王立学士院外国人会員に

本会元監事、原実氏（東京大学名誉教授、印度文学）は、スウェーデン王立文学・歴史・古代文化学
士院（The Royal Swedish Academy of Letters,
History and Antiquities）の1990年11月6日の会議
に於て、その哲学・文献学部門外国人会員（foreign
member of the philosophical-philological class
of the Akademy）に選出された。人文科学では我が
国で初の荣誉であり、この朗報に接し、一同心から
お祝い申し上げる。

原実氏は1930年島根県生まれ。故辻直四郎氏にイ
ンド学の手ほどきを受け、1955年ハーヴァード大学
留学、Ph.D.取得。若くして『マハーバーラタ』十万
詩節を読破し、叙事詩研究の泰斗となった。主著
『古典インドの苦行』（春秋社・1979年）を始め論
文多数。ことに50編を超える英文論文が評価されて
今回の選出となったものと思われる。国際サンスク
リット学会副会長。

会員消息

バルム・アカデミック章

大谷暢順氏に

本会会員大谷暢順氏（本願寺維持財団理事長）は
親鸞の「歎異抄」や安部公房の「他人の顔」を仏訳
し、日仏文化の交流に努めた功績などにより、この
ほどフランス政府よりバルム・アカデミック章を授
けられた。

会員消息

会員の出版物

（1988年～89年）

赤松明彦

『大乘仏典、中国・日本篇』第一巻「大智度論」

梶山雄一・赤松明彦共訳（1989、8）

グロータース

『糸魚川言語地図・上巻』柴田武・グロータース
共著（秋山書店・1988）

堀池信夫

『漢魏思想史研究』（明治書院・1988、11）

石川米雄

A Glossarial Index of the Sukhothai Inscrip-
tions. Bangkok: Amarin Publication, 1989 (with
O. Akagi, N. Engo, Nidhi Aewsrivongse, Aroonrut
Wichienkeo) 253p.

石澤良昭

『アンコール・ワット』（日本テレビ出版部・1
989）『アジア・美の様式』（連合出版・19
89）

堀永信美

『歴史という牢獄—ものたちの空間へ—』（青土
社・1988）

イザベル・シャリエ

『十八世紀から明治の末までの日本絵画史展開』
（パリ・ソルボンヌ大学博士論文、1989）

中村璋八

『都氏文集全釋（共著）』（汲古書院・1988、
12）

『易のニューサイエンス（共訳）』（東方書房・
1989、10）

加藤純章

『経量部の研究』（春秋社・1989、2）

川口久雄

『三訂平安朝日本漢文学史の研究下』（明治書院
・1988、12）

小谷幸雄

『遠心と求心—私の比較文学修業—』（校倉書房
・1989、3）

大地原豊

『公女マ—ラヴィカーとアグニミトラ王、他一篇』
（岩波文庫、1989、3）

尾崎正治

『抱朴子・列仙伝』鑑賞 中国の古典9 (共著)
(角川書店・1988、7、30)

高崎直道

『如来蔵思想I』(法館・1988、12)
『宝性論』インド古典叢書 (講談社・1989、
7)

(1990年以降)

Frédéric GIRARD, Un moine de la secte Kegon à
l'époque de Kamakura, Myōe (1173-1232) et le
"Journal de ses rêves". Publications de l'é-
cole Française d'Extrême-Orient, vol. CLX,
Paris, 1990.

今枝二郎(編集代表) 吉岡義豊著作集 全五卷
(五月書房、1990 完)

川口久雄 源氏物語への道—物語文学の世界—
平安朝漢文学の開花—詩人 空海と
道真— (吉川弘文館、1991)

小林正美 六朝道教史研究 (創文社、1990)

高崎直道 聖徳太子・鑑真 (大乘仏典16)
(中央公論社、1990)

平川 彰 平川彰著作集 全15巻(刊行中)
(春秋社)

松原秀一 異教としてのキリスト教
(平凡社、1990)

関連出版物

Jean-Pierre Diény (ジャン=ピエール・ディエ
ニ). Le symbolisme du dragon dans la Chine
antique (古代中国の龍の象徴). Bibliothèque de
l'Institut des Hautes Etudes Chinoises. Vol. XX

VII. パリ 1987

Hartmut O. Rotermond (éd.) (ハルトムート・ロテ
ルムント). Religions, Croyances et Traditions
populaires du Japon (日本の宗教と民間信仰、民
間伝承) 1. パリ 1988 Maisonneuve & Larose

KWONG Hing Foon (鄭慶歆). Wang Zhaojun (王昭
君). Mémoires de l'Institut des Hautes Etudes
Chinoises. Vol. XXVII. 1986 パリ (博士論文)

○退會者

宮川尚志 1990.12.28

前田専學 1991.3.31

松本浩一 1991.3.31

○新入會員

井狩彌介(IKARI Yasuke) 1990.12.27入會

(京都大学人文科学研究所教授、インド祭式)

山折哲雄(YAMAORI Tetsuo) 1991.1.4入會

(国際日本文化研究センター教授、宗教思想史)

坂本(後藤)純子 1991.3.15入會

(大阪大学文学部非常勤講師、中期インド・アール
語、とくにパーリ語の言語と文献)

成瀬良徳(NARUSE Yoshinori) 1991年3月27日入會

(大正大学講師、宗教学、身體をめぐる神秘思想に
ついて)

鹿島有希子(KASHIMA Yukiko), 1991年3月27日入會

(東洋大学大学院、平安文学)

湯川武(YUKAWA Takeshi), 1991年3月31日入會

(慶應大学教授、イスラム中世史)

○住所変更
濱田正美

堀池信夫
小河織衣

増尾伸一郎
湯山 明

○物故者
大地原豊、金岡照光

フランスからの来日

カルマール教授の来日

報告 羽田 正

日仏東洋学会が日仏学者交換事業の一環として申請していたJean CALMARD先生の招聘が、このほど日仏会館学術委員会（秋山光和委員長）によって採択された。先生は CNRS の教授（Directeur de recherche）で、御専門はイスラム時代イラン史。宗教社会史に特に御造詣が深い。J. Aubin教授のあと、フランス イラン学を代表する学者であり、Encyclopaedia of IslamやEncyclopaedia Iranicaに健筆をふるっていらっしゃるのをご存じの方も多いただろう。現在の御関心は、前近代から近代にかけてのイランにおける宗教勢力（ウラマー）と政治との関係で、ホットな現代史的テーマでもある。本年11月中旬から下旬にかけて2週間の予定で来日され、日仏会館、東洋文庫、京都大学羽田記念館などでの御講演が予定されている。これまで、本会の活動は、中国学、インド学などどちらかといえばアジアの中でも東に偏った形で行なわれてきたが、言うまでもなく、フランス東洋学の中での主流は、中東イスラム世界の研究である。従来、この分野におけるフランス人学者の公式の来日は、きわめて数が少なく、今回のCalmaid先生の訪日が、日仏東洋学交流の新しい一頁となることが期待される。なお、本件に関するお問い合わせは、羽田正（勤務先03-3812-2111 ex.5886、自宅045-901-3750）までお願いします。

平成二年度総会報告

報告 田中文雄

平成2年度会員総会は、平成3年3月27日（水東京・お茶の水の日仏会館において行われた。当日は昨年同様生憎の雨模様となってしまった。ここ数年、東京での総会は学会事務局の置かれている早稲田大学のご好意で大隈会館を利用させていただいていたが、現在工事中とのことで、本年度は会場を移して総会を行った。関西方面から興膳代表幹事、坂出・御牧・中谷・浜田の4評議員・幹事の計5名の方が雨中にもかかわらず遠路来京された。在京の福井会長、加藤評議員を含め8名の評議員・幹事が出席し、他に18名の会員が参加された。春の冷たい雨のため、1ヶ月以上季節が逆戻りしたような寒さの中、熱心な討議と会員相互の懇親がなされた。

総会に先立ち、1時より日仏会館内フォワイエにて、役員会を行った。出席者（敬称略、ABC順）は、福井、浜田、羽田（正）、堀永（信）、加藤（純）、興膳、京戸、前田、御牧、中谷、坂出、田中（文）、山田。学会役員補充選出・第6回日仏コロックなど多くの議題を3時30分まで討議し、終了後ただちに会館内会議室での総会に移った。

総会は興膳代表幹事の司会により、3時30分より始められ、開会に当たり本年度物故された大地原豊顧問ならびに金岡照光会員の冥福を折り黙祷を捧げ、続いて次のように進行した。（敬称略）

1. 開会の辞 粟原圭介
2. 参加者自己紹介
3. 総会議事 （議長 福井文雅）

A. 審議事項

（1）学会役員の補充選出

本会監事・推薦委員会委員の原實先生が一身上の理由により退会されたため、監事と推薦委員会委員の選出が行われ、併せて学会発展のため評議員の補充をした。その結果以下の方が選出された。なお、任期は前任者残任期間とした。

評議員	桑山正達
推薦委員会委員	加藤純章
監事	池田 温

(2) 会計報告

羽田正会計幹事より平成2年度決算報告および平成3年度予算案の説明があり、承認された。別表参照。

なお、福井会長、羽田幹事の努力により会費を滞納されていた会員から会費が送金され、会費収入は予算を大幅に上回る増収となり、潤沢とは言えないが、学会の運営は以前より楽になりつつある。

(3) 第6回日仏コロック

中谷英明幹事より、本年9月にフランスで開催される第6回日仏シンポジウムの準備状況について説明があった。また、山田利明評議員から中国部会の準備状況について補足説明がなされた。詳しくは、『通信』第13号の別稿に記載されるので、ここでは概要だけを記す。

① 今回のテーマは『諸地域文化への仏教の適応』(L'adaptation du Bouddhisme aux cultures locales)とし、1991年9月23日から27日までパリで開催される予定である。これに対して日本からは、各分野(日本学・東南アジア学・チベット学・敦煌学・中国学・トルコ学・インド学)からオブザーバーも含めて30余名の研究者が参加を予定している。

② 当初フランス側の意向では、フランス外務省からの援助は打ち切られるとのことであったが、継続して援助を受けられるようになった。

③ 会議は主会議場と専門部会とに分け、主会議場では日仏双方から各10名ずつが発表を行う。フランス側からは、発表はテーマに沿ったもので、専門的な細部を問題にするのではなく、領域外の研究者にも興味深い理論的、全体的な視点を提供するものであることが要望されている。特に主会議発表者は、留意されたい。

④ 東洋学関係のフランス側組織は、バザン(Louis BAZIN)・フスマン(Gérard FUSSMAN)・シッペール(Kristofer SCHIPPER)の3教授が責任者である。日本側は、以下のような組織である。

代表者	秋山光和
責任者	福井文雅
書記	中谷英明
東南アジア学関係連絡者	石沢良昭
中国学関係連絡者	山田利明

なお、参加申し込みの期限は過ぎているが、参加希望があれば関係者まで申し出てほしい。ただ、主会議での発表は人数の関係で無理であり、専門部会の発表にしてほしい。また、当部会の発表の使用言語は、フランス語とは限定しない。

B. 報告事項

(1) 興膳代表幹事より、以下の会務報告があった。

- 現在会員数は、130名を越えた。しかし、今後とも会員拡大に努力したいので、各会員の協力をお願いしたい。
- 会誌『通信』は、従来通り年2回発行している。第13号(今号)は、総会の報告等を載せ、4月初めに発行の予定である。また、『通信』会員消息に載せる情報を寄せてほしい。
- 会員名簿は、1989年に作成したが、その後会員の増加、移動があり新たに作成し『通信』第13号に掲載する。

(2) 日仏会館学術委員会から当学会への連絡(『通信』第11号参照)を興膳代表幹事が伝え、日仏会館担当者からも説明を受けた。内容は、「日仏学者交換」希望者募集の件、「日仏共同研究」募集の件、「渋沢・クローデル賞」推薦の件である。3件とも、今までのところ当学会会員からの申し出はなかった。計画のある会員は、代表幹事まで申し出てもらいたい。

4. 閉会の辞 中村璋八

総会終了後、5時30分より前田繁樹氏の司会で、同会議室にてカクテル・パーティを行った。多忙中にもかかわらずセカルディ(Hubert CECCALDI、フランス国立高等研究院教授・日仏海洋学会副会長)日仏会館フランス学長がおみえになりご挨拶いただいた。続いて、加藤純章氏によりフランス語での乾杯の発声があり、会員各位に懇親と意見交換がもたれた。また、小河織衣女史・蘆田孝昭氏からも近況報告をいただき和やかに進行し、7時、坂出祥伸氏の閉会の辞で終了した。

会場を提供して下さった日仏会館、および会館関係者に深く感謝し、厚くお礼申し上げたい。

日仏東洋学会平成2年度決算報告

◇収入の部

費 目	予算額	決算額	対予算超過額
普通会員会費	250,000	359,000	+109,000
前年度繰越金	295,939	295,939	0
日仏会館補助金	40,000	36,720	-3,280
利子	0	1,599	+1,599
合 計	585,939	693,258	+107,319

◇支出の部

費 目	予算額	決算額	対予算超過額
印刷費	200,000	129,000	-71,000
通信費	100,000	64,588	-35,412
会議費	30,000	0	-30,000
消耗品費	10,000	9,952	-48
支払報酬費	40,000	53,300	+13,300
雑費	45,939	0	-45,939
予備費	160,000	0	-160,000
合 計	585,939	256,840	-329,099


総収入－総支出：693,258-256,840=436,418

平成2年度残金 436,418円は、平成3年度への繰越金とする。

以上の通り相違ありません。

平成3年3月15日

日仏東洋学会会計監事

代理 丘 山 新 

(東京大学・東洋文化研究所・助教授)

日仏東洋学会平成3年度予算案

◇収入の部

費 目	2年度予算	3年度予算
普通会員会費	250,000	250,000
前年度繰越金	295,939	436,418
日仏会館補助金	40,000	40,000
利子	0	0
合 計	585,939	726,418

◇支出の部

費 目	2年度予算	3年度予算
印刷費	200,000	160,000
通信費	100,000	100,000
会議費	30,000	30,000
消耗品費	10,000	15,000
支払報酬費	40,000	60,000
旅費	0	50,000
雑費	45,939	50,000
予備費	160,000	261,418
合 計	585,939	726,418

原 實
HARA Minoru

服部 正明
HATTORI Masaaki

平井 有慶
HIRAI Yuhkei

平川 彰
HIRAKAWA Akira

廣川 堯敏
HIROKAWA Takatoshi

堀池 信夫
HORIIKE Nobuo

市古 貞次
ICHIKO Teiji

井狩 彌介
IKARI Yasuke

池田 温
IKEDA On

生田 滋
IKUTA Shigeru

今枝 二郎
IMAEDA Jiro

石田 秀實
ISHIDA Hidemi

石田 憲司
ISHIDA Kenji

石井 米雄
ISHII Yoneo

石澤 良昭
ISHIZAWA Yoshiaki

石塚 晴通
ISHIZUKA Harumichi

岩田 孝
IWATA Takashi

彌永 信美
IYANAGA Nobumi

彌永 昌吉
IYANAGA Shokichi

井筒 俊彦
IZUTSU Toshihiko

梶山 雄一
KAJIYAMA Yuichi

柿市 里子
EAKIICHI Satoko

上村 勝彦
KAMIMURA Katsuhiko

金谷 治
KANAYA Osamu

神田 信夫
KANDA Nobuo

狩野 直禎
KANO Naosada

鹿島 有希子
KASHIMA Yukiko

加藤 純章
KATO Junsho

加藤 周一
KATO Shuichi

川口 久雄
KAWAGUCHI Hisao

川合 康三
KAWAI Kozo

川本 邦衛
KAWAMOTO Kunie

川崎ミチコ
KAWASAKI Michiko

喜多村恵子
KITAMURA Keiko

小林 正美
KOBAYASHI Masayoshi

小谷 幸雄
KOTANI Yukio

興膳 宏
KOZEN Hiroshi

熊澤 精次
KUMAZAWA Seiji

栗原 圭介
KURIHARA Keisuke

楠山 春樹
KUSUYAMA Haruki

桑山 正進
KUWAYAMA Shoshin

京戸 慈光
KYODO Jiko

ルム、ジャン=マリイ
LOURME, Jean-Marie

前田 式子
MAEDA Noriko

前田 繁樹
MAEDA Shigeki

増尾伸一郎
MASUO Shin'ichiro

松原 秀一
MATSUBARA Hideichi

御牧 克己
MIMAKI Katsumi

三崎 良周
MISAKI Ryoshu

宮崎 市定
MIYAZAKI Ichisada

宮澤 正順
MIYAZAWA Masayori

森安 孝夫
MORIYASU Takao

明神 洋
MYOJIN Hiroshi

中村 元
NAKAMURA Hajime

中村 璋八
NAKAMURA Shohachi

中谷 英明
NAKATANI Hideaki

成瀬 隆純
NARUSE Takazumi

成瀬 良徳
NARUSE Yoshinori

小河 織衣
OGO Orië

岡本 さえ
OKAMOTO Sae

岡本 天晴
OKAMOTO Tensei

丘山 新
OKAYAMA Hajime

岡山 隆
OKAYAMA Takashi

大久保 泰甫
OKUBO Yasuo

尾本 圭子
OMOTO Keiko

小名 康之
ONA Yasuyuki

大谷 暢順
OTANI Chojun

尾崎 正治
OZAKI Masaharu

定方 晟
SADAKATA Akira

齊藤 希史
SAITO Mareshi

坂出 祥伸
SAKADE Yoshinobu

酒井 忠夫
SAKAI Tadao

坂本(後藤)純子
SAKAMOTO-GOTO Junko

櫻井 清彦
SAKURAI Kiyohiko

里道 徳雄
SATOMICHI Norio

澤 美香
SAWA Mika

ザ・アイドル、アンナ
SEIDEL, Anna

白杉 悦雄
SHIRASUGI Etsuo

白戸 わか
SHIRATO Waka

庄垣内正弘
SHOGAITO Masahiro

菅原 信海
SUGAHARA Shinkai

鈴木まどか
SUZUKI Madoka

鈴木 董
SUZUKI Tadashi

高橋 稔
TAKAHASHI Minoru

高崎 直道
TAKASAKI Jikido

高田 時雄
TAKATA Tokio

武内 紹人
TAKEUCHI Tuguhito

田中 文雄
TANAKA Fumio

館野 正美
TATENO Masami

徳永 宗雄
TOKUNAGA Muneo

礪波 護
TONAMI Mamoru

坪井 善明
TSUBOI Yoshiharu

都留 春雄
TSURU Haruo

梅原 郁
UMEHARA Kaoru

和田 久徳
WADA Hisanori

渡會 顯
WATARAI Akira

八木 徹
YAGI Toru

山田 均
YAMADA Hitoshi

山田 利明
YAMADA Toshiaki

山本 澄子
YAMAMOTO Sumiko

山本 達郎
YAMAMOTO Tatsuro

山折 哲雄
YAMAORI Tetsuo

矢野 道雄
YANO Michio

吉田 敦彦
YOSHIDA Atsuhiko

吉田 敏行
YOSHIDA Toshiyuki

吉田 豊
YOSHIDA Yutaka

湯川 武
YUKAWA Takeshi

由木 義文
YUKI Yoshifumi

遊佐 昇
YUSA Noboru

明海大學外國語學部講師

湯山 明
YUYAMA Akira

國際佛教學研究所長

編集後記

暑気も和らぎ、清々しい秋風の立つ季節も間近となりました。皆様には益々ご健勝のことと拝察申し上げます。『通信』第13号の発行は予定より半年近くも延引しました。いろいろ予期せぬこともありましたが、なにより編集子の怠慢によるもので、深くお詫び申し上げます。

京都大学から上智大学にお移りになった石井米雄先生からは学会消息「ロベール・ラング先生以後」を、興隆宏代表幹事からは新刊紹介「錢林森編『牧女与蚕娘』」を頂きました。大変興味深い記事をお寄せ下さり有難うございました。

大地原豊氏を追悼して親友島田彦次先生が一文をお寄せ下さり、御牧幹事にワープロ入力頂きました。大地原氏を知る人は誰しもその魅力溢れる精神の消失を嘆かずにおれまいと思います。故ルイ・ルヌー教授に対して謂わば兄弟弟子であったコレット・カヤ女史（フランス学士院会員）は近刊の "Bulletin d'Etudes Indiennes" に追悼文を寄せ、 "Comment, en effet, ne pas être fier d'avoir été l'élève ou l'ami d'un tel maître?" と記しておられます。

高田幹事制作の新名簿を巻末に添えました。ご利用下さい。

次号には第6回日仏シンポジウムの模様をお伝えすることができようと思います。他の記事もどしどしお寄せ下さいますよう。 (H. N.)

投稿規定

会員諸氏からの投稿を募ります。

できればNECのPC-98を用い、以下の設定の「一太郎」(ver.3 / ver.4) で入力したフロッピーまたは打ち出し原稿をお送り下さい。

用紙サイズ : A4 1行文字数 : 46
1ページ行数 : 41 上端マージン : 23
下端マージン : 27 左端マージン : 32
右端マージン : 90

もちろんお手持ちのワープロで上記設定のごとく印刷した原稿でも結構です。

なお手書き原稿は、当方で入力致します。

日 仏 東 洋 学 会 通 信 第 1 3 号
1991 (平成 3) 年 8 月 20 日 発 行

編 集 兼 日 仏 東 洋 学 会

発 行 者 福 井 文 雅

本 部 : 〒 1 0 1 東 京 都 千 代 田 区 神 田 駿 河 台 2 - 3 日 仏 会 館 内
発 行 所 〒 6 7 3 神 戸 市 西 区 伊 川 谷 神 戸 学 院 大 学 中 谷 英 明 研 究 室
Tel. 078 974 1551 Fax. 078 974 5689

印 刷 所 〒 5 3 0 大 阪 市 北 区 浪 花 町 9 - 1 2 - 4 0 2 六 稜 舎 (Tel. 06 371 1681)
